

葬送の装いからみる文化比較

Comparison of Clothing Cultures from the View Point of Funeral Procession

増田 美子*¹⁺, 大枝 近子*²⁺, 梅谷 知世*³⁺, 杉本 浄*⁴⁺, 内村 理奈*⁵⁺

Yoshiko Masuda*¹⁺, Chikako Ooeda*²⁺, Tomoyo Umetani*³⁺, Kiyoshi Sugimoto*⁴⁺ and Rina Uchimura*⁵⁺

*1 学習院女子大学 国際文化交流学部 東京都新宿区戸山 3-20-1

Faculty of Intercultural Studies, Gakushuin Women's College

3-20-1 Toyama, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan

*2 目白大学 社会学部

Faculty of Social Science, Mejiro University

*3 学習院女子大学 国際文化交流学部

Part-time Lecturer, Faculty of Intercultural Studies, Gakushuin Women's College

*4 東海大学 文学部

Part-time Lecturer, School of Letters, Tokai University

*5 青山学院女子短期大学

Part-time Lecturer, Aoyama Gakuin Women's Junior College

+ 服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract : This study was for its object to research for the look in the funeral ceremony and make the point of the different and common point between the respective cultural spheres of the Buddhism, Hinduism, Islam and Christianity clearly. In the year 21, we tried to grasp the reality of costumes of funeral courtesy in modern times and present-day. And it became clear in the result, Japan, the Buddhist cultural sphere, China and Taiwan, the Buddhism, the Confucianism and the Taoism intermingled cultural sphere, India, the Hindu cultural sphere and the Catholic cultural sphere that the basic color which concerns death was white.

はじめに

本研究は、最も保守的な儀礼として各国の伝統文化を伝えている可能性が高い葬送儀礼の装いを調査し、仏教文化・ヒンドゥー教文化・イスラム教文化・キリスト教文化の各宗教文化圏間の共通点および相違点を明らかにすることを目的としたものである。21 年度は、それぞれの研究対象の国や文化圏における近現代の葬送儀礼の実態を把握することに努めた。

研究方法

増田は中国・台湾の葬礼について、文献収集及びその解読により全体的傾向の把握に努め、大枝はイスラムの死生観および葬礼の文献収集及び AFP WAA を利用しての情報収集を行い、梅谷は明治・大正

*1) yoshiko.masuda@gakushuin.ac.jp

期の国葬・大葬に関する雑誌・新聞記事を中心とした史料及び地方の葬礼写真などの収集に努めた。杉本は東インドの旧都カタッタにおけるヒンドゥー教徒葬礼の検討を目的として現地に赴き、1ヶ月ほど予備調査と文献調査を行った。また一方で、ロンドンの図書館・博物館等で19世紀の植民地インドにおける葬礼に関するイギリス人の叙述収集に努めた。内村はAFP WAAを中心に現代ヨーロッパの葬礼写真の収集を行うとともに、パリのフランス国立図書館でアンシャン・レジーム期の喪服に関する王令や葬儀屋パンフレット等の文献収集に努めた。またこれら個別の研究と平行して、数度の研究会を開き、各自の研究の進捗状況と研究成果の報告を行うとともに、討議を重ねた。

研究成果

日本における黒の喪服の導入は1878年の大久保利通の葬儀で既にみられており、明治時代に8回行われた国葬や1897年の英照皇太后の大葬において、政府は大礼服や通常礼服に黒腕章・黒帽章をつけることを定めている。庶民は江戸時代以来の白系統の喪服であったが、大葬において和服の左肩に黒布をつけるよう服喪心得が通達され、次第に喪の色は黒が正式であるとの認識が浸透するようになっていった。

一方中国においては、今日でも伝統的な喪服は白であり、死が確定すると白い布を買ってきて女性は白鉢巻をし、男性は白帽子をかぶり、靴にも白布を貼る。台湾でも同様に伝統的な喪服は白か生成りである。しかし、現在では両国とも黒の洋装喪服が多くなっている。

東インド・オリッサ州カタッタにおけるヒンドゥー教徒の葬送儀礼では、男女とも白い喪服を着用する。しかしこれは一部の親族のみのことであり、家庭祭司にインタビューした所、総体的に見ると喪服に関する特別な規定はなく、会葬者はほぼ普段着のままが多いとのことである。

イスラム文化圏においては、「コーラン」に示されているように、死は生の最終到達点ではなく、人間は死の後に復活し、復活の後には永遠の生命が与えられると考えられているため、葬儀は迅速かつ簡素で、喪服に関しても形や色の決まりは無い所が多いようである。

一方、ローマ教皇ヨハネ・パウロ2世の葬儀を中心に調査したところ、カトリックの葬礼は明確なシンボルに満ちており、死は復活信仰と結びつくことから、カトリックでも典礼の基本色は白であった。しかし主たる参列者である枢機卿の衣服は赤であり、黒も混在しているが、黒は慣例を重んじるどころからきたものではないかとされている。

以上、仏教文化圏の日本、仏教・儒教・道教の混在した中国・台湾、インドのヒンドゥー教文化圏およびヨーロッパのカトリック文化圏においては、いずれも死と関わる基本的な色は白であったことが明らかとなった。この死と関わる共通の色である白に対して、各文化圏はどのような意味をもっていたのかを考究することが、今後の課題の一つに加わった。